月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.138



突如出現した“逆しまのバベル”
大陸統一の野望を阻止することができるのか
創の軌跡 THE MISERABLE SINNERS

ワイスマンに囚われたヨシュア
エステルに待ち受けるものとは
英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～

ヴァンに運命のクラス分けテストが待ち受ける！
も～っと集まれ！ファルコム学園

メインストーリー更新！
ユウナが夏ぴったりな衣装を披露！
『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース
英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を

発売まであと2ヶ月！
前作登場キャラの新イラストが一挙到着！

『英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ －CRIMSON SiN－』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

レン・ブライト

Renne Bright（CV：悠木碧）

年齢：17 歳
武器：大鎌

「あら、今の私はどこにでもいるようなただの美少女生徒会長よ？」









留学生としてリベール王国からやってきた、名門校《アラミス高等学校》の２年生で、同じ学生寮に暮らすアニエスの先輩。あらゆる難題を的確かつ完璧にクリアしてしまう天才的な能力を有しており、学内では無敵の生徒会長としてその名を知られている。結社《身喰らう蛇》で執行者として活動していた過去を持ち、幼少時から多数の博士論文を発表するなど常人の理解を越えた経歴を持つレンはＣＩＤ（中央情報省）や大陸各地の技術者、そして、裏社会からも一目置かれる存在に。マフィア《アルマータ》絡みの事件ではその実力を活かしてアークライド解決事務所や遊撃士協会に助力していた。共和国入りした当初の目的である《技術連盟》の取りまとめも目途が付き、「アラミス学藝祭」を目前に控えたレンは一時的にリベール王国へ里帰りしたようだが……。

発売まであと2ヶ月！
前作に登場したキャラクターたちの新規イラストも続々と到着！



タイトル：英雄伝説 黎の軌跡 II -CRIMSON SiN-
発売日：2022年9月29日予定
ジャンル：ストーリーRPG
対応機種：PlayStation5 / PlayStation4
プレイ人数：1人
販売価格：【通常版】7,800円（税抜）
【Limited Edition】10,000円（税抜）
【Limited Edition】※シナリオブック付き 12,800円（税抜）
【DL通常版】7,500円（税抜）
【デジタルデラックス版】10,000円（税抜）
【シーズンパス】3,500円（税抜）
CEROレーティング：C

カルバード共和国を舞台とした『軌跡』シリーズ『黎の軌跡』の第２作『黎の軌跡Ⅱ』。今回は、前作にも登場したキャラクターたちの新規イラストが続々と到着。さらに、シリーズでもお馴染みとなった、自由にパーティーが組めるエリア探索システムの最新版「お伽の庭城（メルヒェンガルテン）探索」の詳細も明らかに！

©2022 Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.



シズナ・レム・ミスルギ

Shizuna Rem Misurugi（CV：内田真礼）

年齢：24歳
武器：漆黒の大太刀

「ああ、別に断ってくれてもいいよ？
それならそれで勝手に手伝うだけだから。」

《黒神一刀流》の使い手にして《白銀（しろがね）の剣聖》の異名を持つ最強の侍衆《斑鳩（いかるが）》の副長。長い刀身に細やかな紋様が刻み込まれた漆黒の大太刀を得物としており、その剣術は並居る強者を圧倒するほど。あどけなさの残る顔立ちや天衣無縫な振る舞いが目につくが、師から授かった《観の眼》で物事の本質を捉え見抜くなど、剣聖の名に相応しい器を備えている。共和国東部の《イシュガル山脈》に潜伏していたことがきっかけでアークライド解決事務所と接触。その後、マフィア組織《アルマータ》が引き起こした一連の事件にも関わる形で一時的にヴァンたちに助力することとなった。どうやら共和国政府と何らかの取引を行っているようだが、未だ《斑鳩》としての組織の全貌、活動目的は判明していない。



カシム・アルファイド

Kasim Al-Fayed（CV：梅原裕一郎）

年齢：28歳
武器：軍用バスターランス

「お前の〝焔〟の在り方を決めるのは、
フェリーダ――他でもないお前自身だ。」

《灼飆（カムシン）》の異名を持ち、高位猟兵団《クルガ戦士団》一の戦士と謳われたフェリの実兄。佇まいは自然体で涼しげでありながら一切の隙が無く、巨大な軍用バスターランスを軽々と使いこなすほどの膂力と優れた指揮能力を兼ね備え、戦闘力においては“最強”の一角と目されている。現在は《マルドゥック総合警備会社》の警備主任を務めており、２年前には戦術教官としてヴァンに撃剣（スタンキャリバー）と零式勁術による戦術を指南した。クルガ戦士団とは縁を切っており、年の離れた妹・フェリに対しては突き放すでも親しくするでもないが、戦士として、一人の人間として成長しようとするひた向きな妹の姿を遠くから見守っているようにも見える。





メア

（CV：長縄まりあ） *Mare*

年齢：？？歳



「いつでも行けるわ、ヴァン――！
“本家”としての意地を見せなさい！」

ヴァンの戦術オーブメント《Xipha（ザイファ）》にインストールされている特別製のホロウコア（支援用 AI）で、自己主張の激しいタイプ。本来は AI として設定されたパーソナリティなのだが、原型導力器（オクト＝ゲネシス）の共鳴とともにホログラムのような状態で現実世界に顕現し、AI とは思えないような“意志”を示す。膨大なシャード（霊子装片）を自在に制御することができるらしく、ヴァンの全身にシャード装甲を纏わせ、《魔装鬼（グレンデル）》へと変貌させることで幾度も危機を救ってきた。マフィア組織《アルマータ》との闘いの中で、メア自身が何らかの役目を帯びた存在であること、また、特殊な状況下では人間の意識さえ乗っ取れることが明らかになったが……？





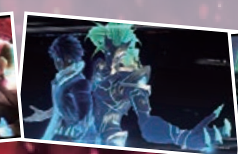
グレンデル（魔装鬼）

（CV：小野大輔） *Grendel*



妖精型の支援 AI「メア」が現実世界に顕現し、全身にシャード（霊子装片）装甲を纏うことでヴァン・アークライドが変貌した姿。「メア」のサポートでグレンデル化することで、ヴァンの身体能力は大幅に引き上げられ、人知を超えた凄まじい戦闘力を発揮する。共和国首都で発生した猟奇殺人事件の犯人と思われる紅黎き魔装鬼、「グレンデル＝ゾルガ」もシャード装甲を纏った姿だが、それがヴァンのグレンデル同様、“枷”としてのものかは不明。事件を追う中で、メアと共に、幾度となくグレンデル＝ゾルガとその支援ホロウ「緋のアルテラ」と対峙していくこととなる。







フェリ・アルファイド

（CV：小倉唯） *Feri Al-Fayed*

年齢：13 歳
武器：突撃銃剣（アサルトソード）



大陸中東部の高位猟兵団として知られる部族「クルガ戦士団」に所属している少女猟兵。誇りと伝統を重んじるクルガの一人として闘いを必ずしも悪とは考えておらず、父や兄のような一人前の戦士を純粋に尊敬し、幼少期から訓練を積んできた。戦士としての気高さや勇敢さを持つ一方、基本的には純真で素朴な少女で、未知の物や体験に対して年相応に目を輝かせる姿や、可愛らしい趣味なども多く見せる。彼女と個人的な親交があったとある猟兵の捜索を通じてヴァン達と出会い、その後はクルガの外の世界で経験を積むべく、解決事務所に身を置く事に。事務所のメンバーが一時解散した後は故郷《クルガの里》に帰郷。里の新年祭で“巫女役”を務め、家族や里の人々に成長ぶりを見せたというが……。

「お兄ちゃん、わたしも頑張るから……
ヴァンさんたちと一緒に！」







アーロン・ウェイ

Aaron Wei（CV：内田雄馬）

「ルウ家は関係ねぇ――俺は俺として、幼馴染からの頼まれ事（4spg）を片付けに来ただけだ。」



年齢：20歳
武器：双星剣（ツインフェンサー）

破天荒で血気盛んながら故郷である《煌都》ラングポート・東方人街を深く愛し、《麒麟児》《羅州の小覇王》として人々を惹きつける青年。鮮やかな赤髪が目を引く美青年で、東方華劇の“女形”として人気を得る一方、東方三大拳法の一つ《月華流》の拳法と剣術を修める実力者でもあり、《黒月》からも一目置かれる存在となっている。しかし本人は黒月の一員になるつもりはなく、あくまでも我が道を征くというスタンスを貫いており、そんな中、依頼で煌都を訪れたヴァンたちと出会った。その後、煌都を揺るがす事件の中で自分自身の真実と黒月の策謀を知り、己の在り方を見直すべく、解決事務所に身を寄せる道を選んだ。一時解散後は故郷に戻り、黒月から一層期待を受けるも自身のベースは崩さず、裏解決屋の仕事で得た知見を活かして独自に活動を行っているという。







リゼット・トワイニング

Risette Twinings（CV：石川由依）



年齢：20歳
武器：拳銃＆ブレードギア

《マルドゥック総合警備会社》でサービスコンシェルジュ（SC）を務める女性。メイド服と淡い水色の長髪が印象的なクールビューティーで、人当たりの良い丁寧な物腰とユーモアを兼ね備えた才人。撃剣やホロウコアのテスターとしてマルドゥック社と契約しているヴァンとは、通信越しに3年もの付き合いがあった。しかし、とある事案に対処する中で初めてヴァンの前に姿を現し、以後、解決事務所に“出向”の形で身を置き、卓越した技能で仲間を支える。彼女の身体は“本来のもの”ではなく、自身に“身体”を与えたマルドゥック社には底知れなさも感じているが、同時に多くの経験や出会いの機会をもたらしてくれた、大切な居場所として受け入れてもいる。事務所メンバーの一時解散後は本社のあるオレド自治州に帰還。身体の定期メンテナンスを受ける傍ら、親しい友人とも会っていたようだ。

「所詮は偽物の身体……疑似的な信号が見せる幻想に過ぎませんから。」







カトル・サリシオン

(CV：田村睦心) *Quatre Salision*

「僕には大切なものがあるって分かってたのに……本当に、本当にごめん……」

年齢：16歳
武器：パルスガン&導力ドローン

共和国随一の学術研究機関《バーゼル理科大学》で修士課程を専攻する若き研究者。XEROS（ゼロス）とFIO（フィオ）という、自身が開発に携わった導力ドローンを従えている。やや長めの銀髪と、少女のようにも見える中性的な容貌が印象的な少年で、理知的で優しい性格ながら、どこか他人と一定の距離を置くような雰囲気もある。ある特殊な出自と過酷な環境で育った過去を持ち、《三高弟》の一人、ハミルトン博士に保護されてからは彼女を実の祖母の様に慕い育ってきた。とある事件を通してヴァン達と出会い、同時に技術や学問と改めて向き合う機会を得る事になり、自らの持つ技術を役立てるべく解決事務所に参加。事務所メンバーの一時解散後はバーゼルに戻り、ハミルトン博士や同門の研究者たちと共に過ごしていたようだ。一方で、ヴァンは彼の出自について何か察しているようだが……。









ジュディス・ランスター

Judith Ranster（CV：日笠陽子）

年齢：23歳
武器：流星鞭（ステラビュート）

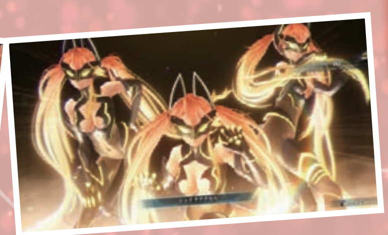
カルバード共和国の導力映画界で名を馳せる、実力派トップ女優の一人。妥協を許さない高いプロ意識と、明るく気さくな人柄を併せ持つことから多くのファンに慕われ、関係者からも厚い信頼を受けている。一方でその自信からか、どこか抜けている部分を垣間見せてしまうことも。その正体は、共和国内で半ば都市伝説的に語られる義賊《怪盗グリムキャッツ》。女優として活躍する裏でグリムキャッツに"変身"し、自身の持つ正義感に従って弱きを助け強きをくじく行いをしている。ヴァン達裏解決屋とは女優・怪盗双方の活動の中で何度か遭遇するうちに正体を知られる事になってしまい、なし崩し的に解決業務に協力するようになった。なお、グリムキャッツに"変身"する能力や義賊としての使命は祖母・ドミニクの代から何らかの形で受け継がれてきたものだというが……？

「っていうかアタシは違うからね!? 解決事務所に入った覚えはないんだけど!!」













ニナ・フェンリィ

（CV：上田麗奈） *Nina Fenly*

年齢：19 歳



「あのステージは――
私には、ちょっと眩し過ぎますから。」



東方系のハーフにして、若手ながら天才的な演技力を誇る実力派女優。演技に関しては完全に役になりきってしまう“憑依型”で、その天賦の才能に注目する業界関係者は数知れず。物腰柔らかで謙虚な人柄であり、憑依型と言われる演技の評についても本来の自分を持たないが故に過ぎないと語る事も。一方で女優としてのプロ意識や向上心は確かなもので、理不尽な事に対しては頑固に立ち向かう一面も見せる。ジュディスとは互いに信頼のおける先輩・後輩であると同時に切磋琢磨するライバル関係。七耀暦 1208 年に開催された《サルバッド映画祭》では主演女優賞を獲得し、ジュディスを超える事となった。







ドミニク・ランスター

（CV:斉藤貴美子） *Dominique Ranster*

年齢：69 歳



「よぉ、ガキども。ちょいと
オイタが過ぎるんじゃないかい？」

ジュディスの祖母にして、かつて一世を風靡した伝説のシャンソン歌手。そして、初代《グリムキャッツ》でもある。老齢ながら豪快かつ活動的、そして自他に厳しい性格。身体能力やアーティストとしてのセンスについても未だ衰えを見せていない。現役を引退した現在も芸能界では多大な影響を誇っており、数々の導力映画や各種イベントにて演技指導・プロデュースで活躍、その尽くを成功へと導いている。孫娘であるジュディスには時に厳しい言葉をかけつつも、当代としてのグリムキャッツの生き様を温かく見守っている。ちなみに、彼女が如何にして初代グリムキャッツの力を手にしたのかについては、ジュディスも詳しくは知らないようだが……。







ラトーヤ・ハミルトン

（CV:井上喜久子） *Latoya Hamilton*

年齢：74 歳



「カトル。研究者としても、
貴方自身としても……
どう在りたいかゆっくり
考えてみるといいわ。」

《導力革命》の祖、C・エプスタイン博士の直弟子である“三高弟”の一人。共和国の導力化に多大な貢献をし、数年前までバーゼル理科大学の名誉教授やヴェルヌ社の最高顧問を務めていた。最高位の導力学者として聡明な頭脳と膨大な知識を誇る一方、寛大で慈悲深い人格者でもあり、学問や技術を人々のために使う事を是としている。ある特異な環境から保護されたカトルを引き取り、彼に学問の意義をはじめとする多くの事を教えてきたのも彼女である。不毛化の進む大陸東部を救おうと東方の地で研究を行っていたが、工学都市バーゼルで起きた事件がきっかけで再び共和国へと戻ってきた。







ミラベル・アールトン

（CV:桜木つぐみ） *Mirabel Aalton*

年齢：22 歳



「主任のシゴキは
えげつないやろうけど、
骨は拾ったるさかい
あんじょうきばりや！」

クセの強い話し言葉が特徴的な、《マルドゥック総合警備会社》に所属するサービスコンシェルジュ（SC）。鉄火肌な女性でかなり大雑把な面もあるがタイプが真逆の同僚・リゼットとは意外と気が合うらしく、公私にわたって友人関係を築いている。マルドゥック社が新規事業として立ち上げた導力ネット上の仮想空間サービス《お伽の庭城（メルヒェンガルテン）》のサービスに関わっているらしく、解決事務所にある相談を持ち掛けてくるのだが……。









自由にパーティーを組み替えて《お伽の庭城(メルヒェンガルテン)》を探索せよ！

シリーズでもお馴染みになっている、自由にパーティーを組んでダンジョンを探索していくシステムは今作でも健在。今回探索するのは《お伽の庭城(メルヒェンガルテン)》と呼ばれる、戦術オーブメント《Xipha(ザイファ)》と導力ネットワークを利用したゼムリア大陸初の仮想空間サービスだ。



探索

「メルヒェンガルテン」は仮想空間のため、遠隔地にいるメンバーも含め、バトル参加が可能なメンバーの中から自由にパーティーを編成することが可能。各区画で指定されるミッションを達成することで次の区画への移動が可能となり、一定区画を進むと強敵との戦闘が待っている。その戦闘に勝利することで、様々なレアアイテムが獲得できるほか、「ミスティックキューブ」解析に必要となる「シャードトークン」も大量に入手できるのだ。





ミスティックキューブとは？

庭城探索や「シャードサーチ」によって入手した「シャードトークン」と引き換えにメアが解析を行うことができるアイテム。解析を進めることで大量のセピスを入手できるほか、消費アイテム、アクセサリー、レア装備、更にはクラフト強化に必要な特殊アイテムもゲットすることができる。







シャードサーチとは？

街中やダンジョン等でR3ボタンを押すことで、キャラクターの周囲にシャード領域を展開さすることができ、そのシャードに反応するオブジェクトを発見することができるシステム。発見できるアイテムは「シャードトークン」のほかにも、アイテムや回復装置、時にはブレイクオブジェが見つかることも。怪しいと思った場所では積極的にサーチしてみよう。





クラフト強化アイテムで庭城以外でも大幅パワーアップ！

庭城探索で入手できるクラフト強化の特殊アイテムを使用すると、各キャラクターのクラフト／Sクラフトが段階的にパワーアップしていく。パワーアップさせることで、威力やスタン値が上昇するほか、硬直時間も短縮し、使い勝手が大きく向上していく。また、一定段階までクラフトを強化すると、命中率アップや最大HPアップといった、キャラクター毎のボーナスも用意されている。しかも、このクラフト性能は《メルヒェンガルテン》の外でも適用されるので、メインストーリーを進めていく上でも大きな助けになってくれること間違いなし！



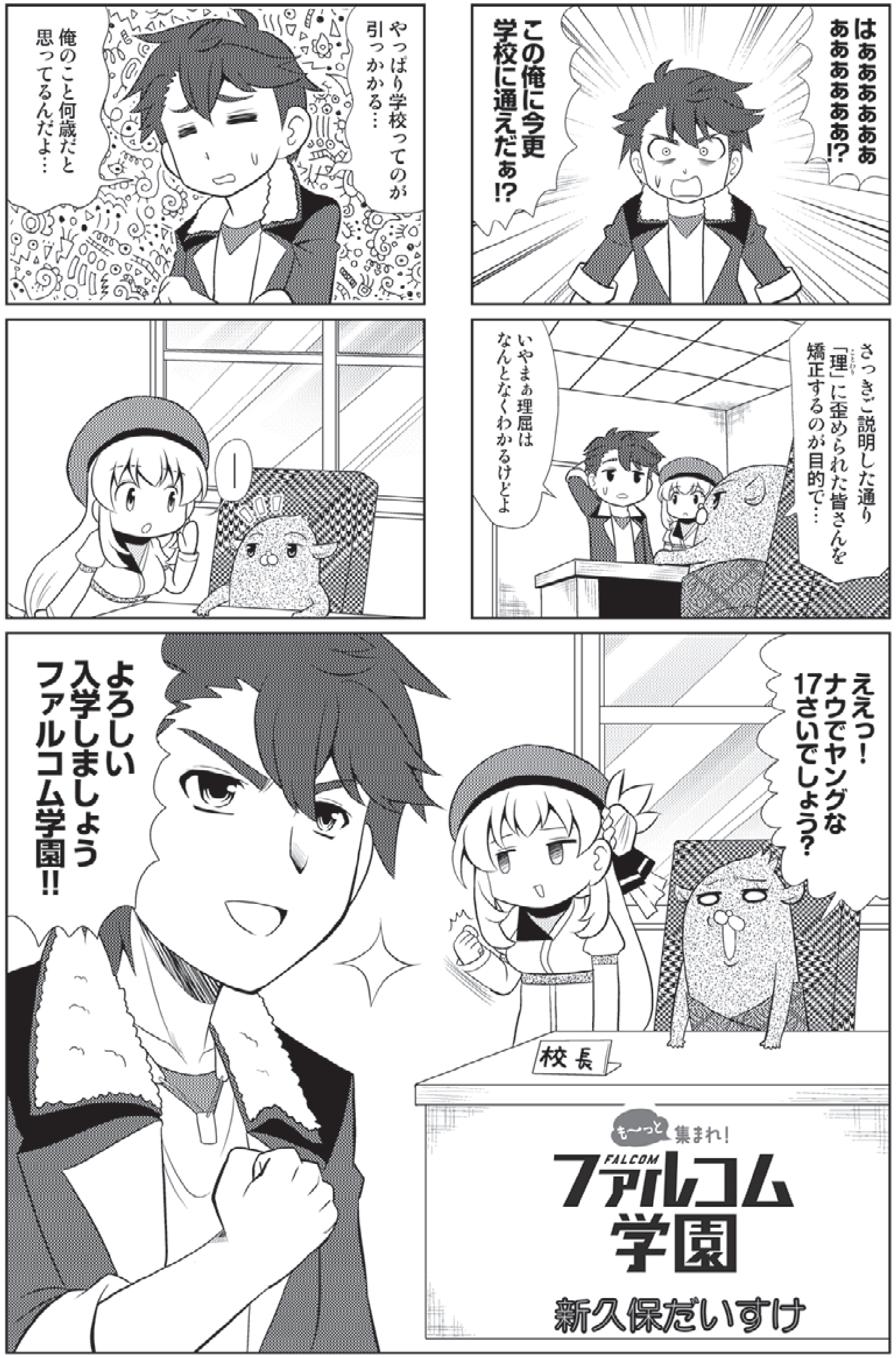
マルドゥックサポートを利用してより快適に探索を進めよう！

「メルヒェンガルテン」はマルドゥック社の仮想戦闘シミュレーターのデータをもとにしているため、ミラベル・アールトンSC（サービスコンシェルジュ）が様々なサポートをしてくれる。サポート内容は、探索やバトルに欠かせないCP（クラフトポイント）の補給や、アイテムの売買サービス。そして、ミニゲーム形式の様々なミッションに挑戦できるアクティビティサポートなどなど。さらには、「メルヒェンガルテン」内のBGMまで変更することが可能になっているのだ。





★ヴァン三部作、ついに完結! しらんけど★



通過儀礼



所長の苦手なもの



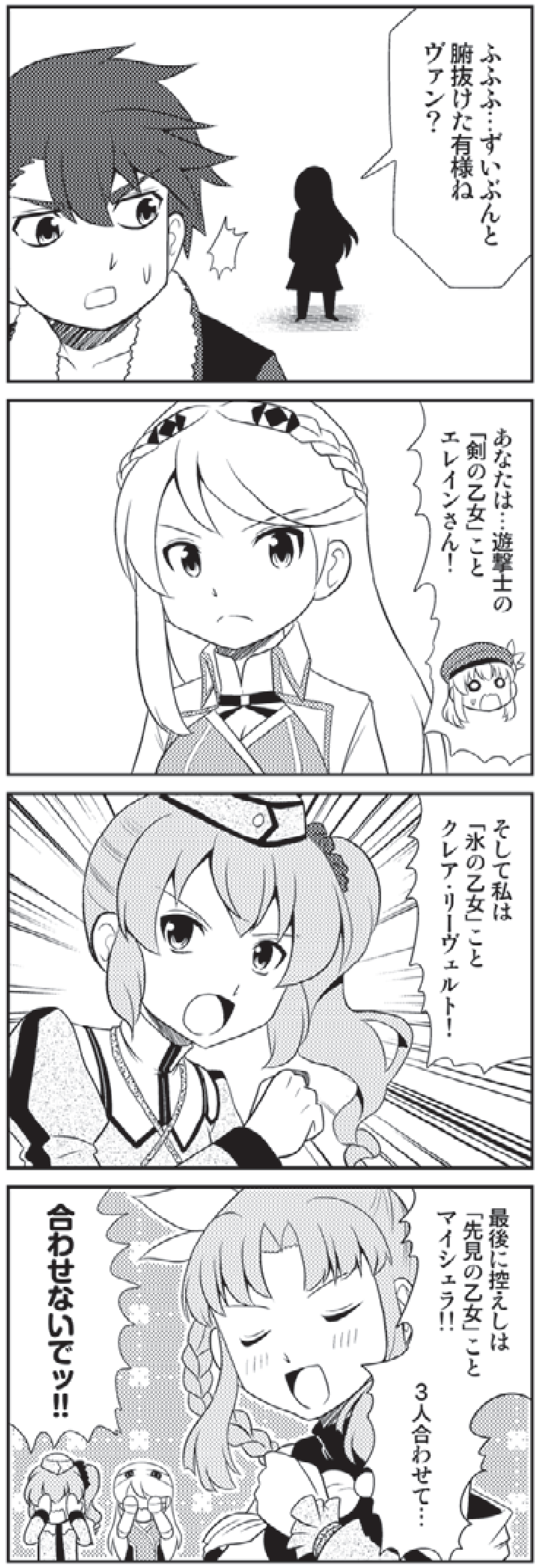
那由多の場合



察しのいい男



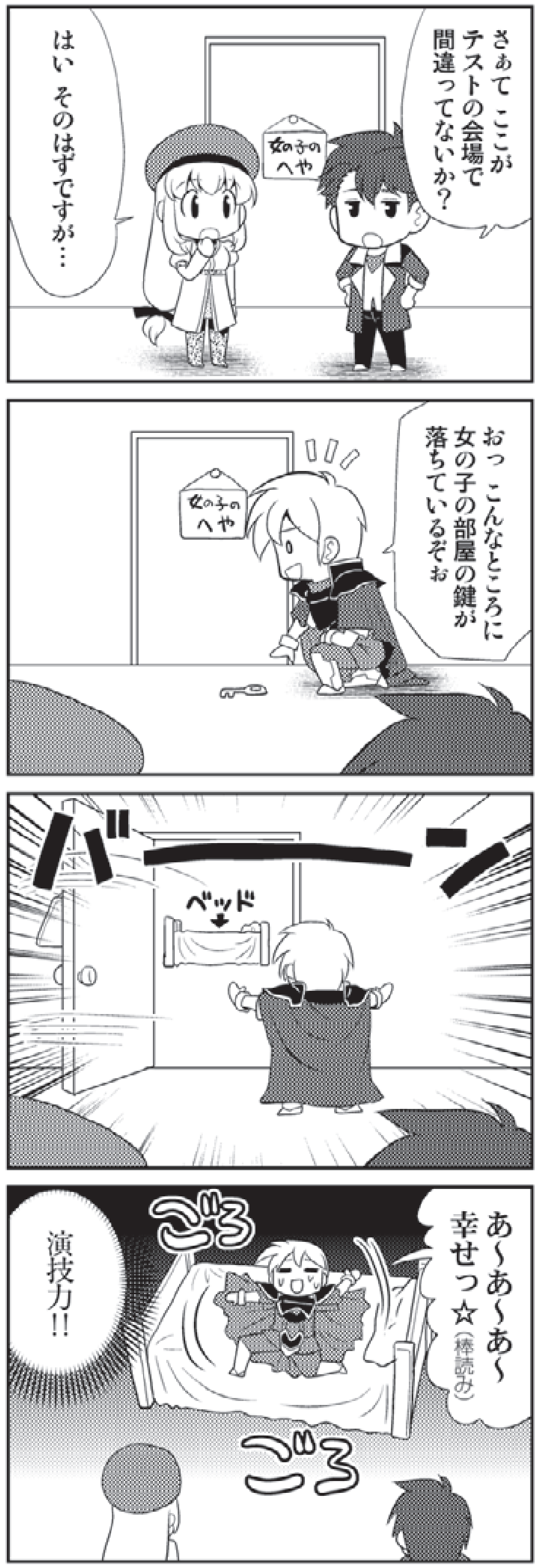
合計年齢



鬼畜な眼鏡



知られざる眠り



どんな行動でも



レン先輩



ヴァンさんのクラス



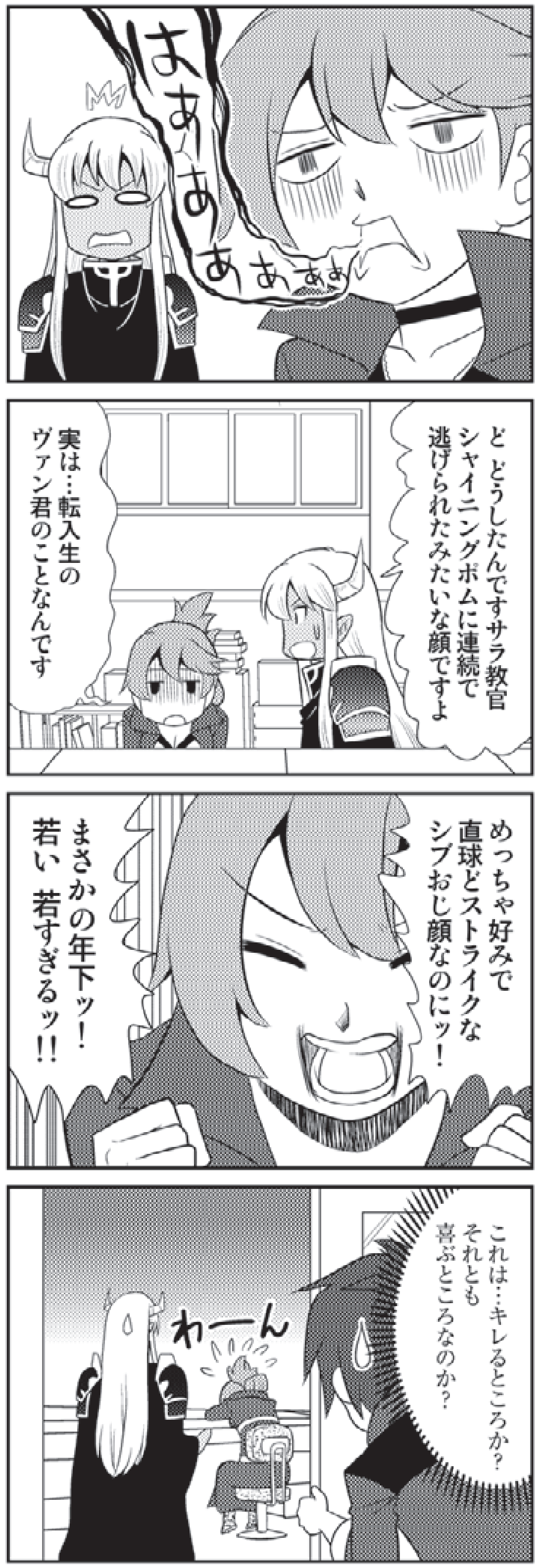
再会と感謝と



アニエスの野望



判断に困る評価



ザナドゥではよくあること



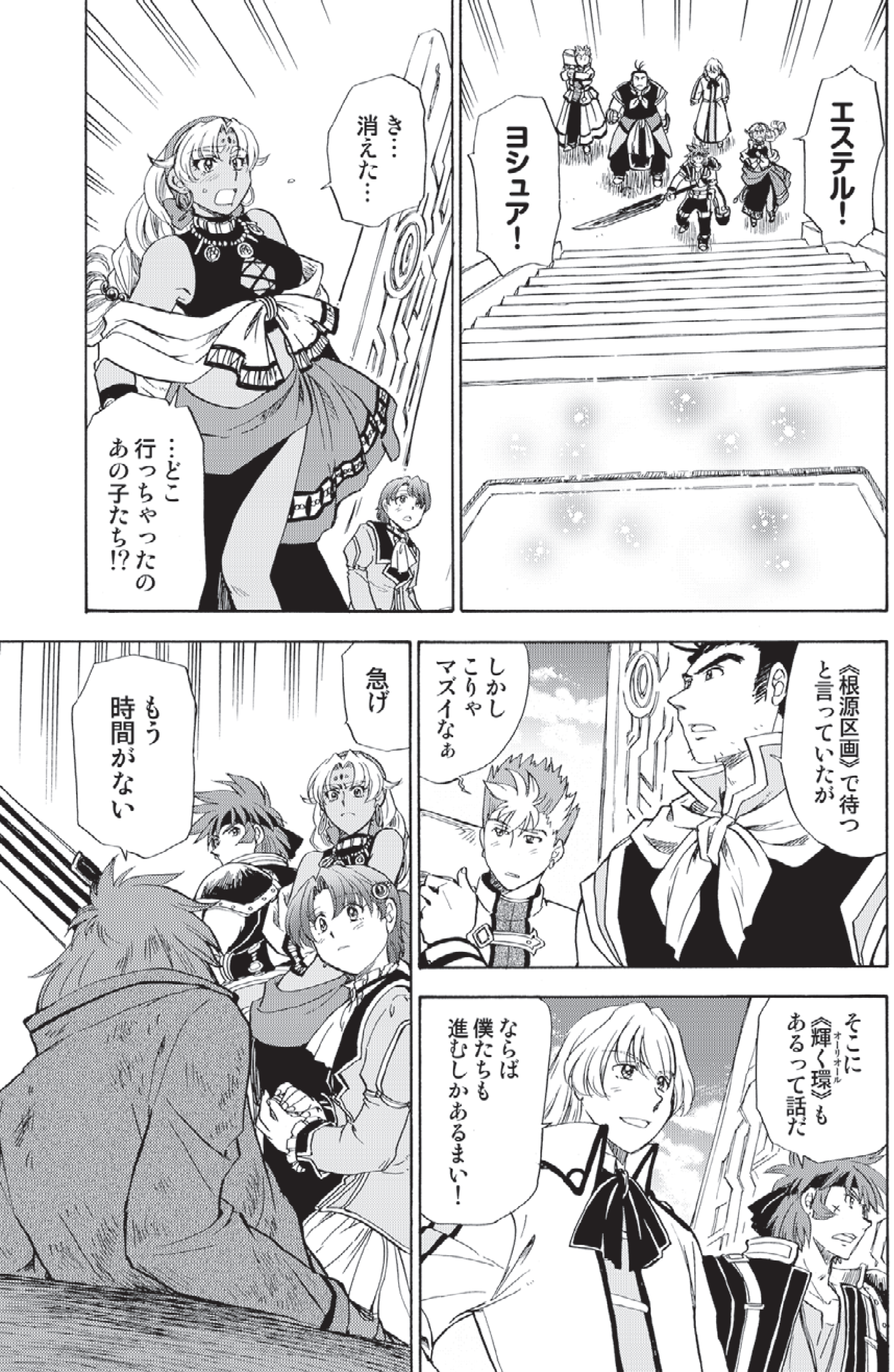

ねえ
ヨシュア!
どうして…こっちに戻ってきてよ
空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
ヨシュア…
そんな…
そんな目をしないでよ…!
フフ
無駄なことはやめたまえ

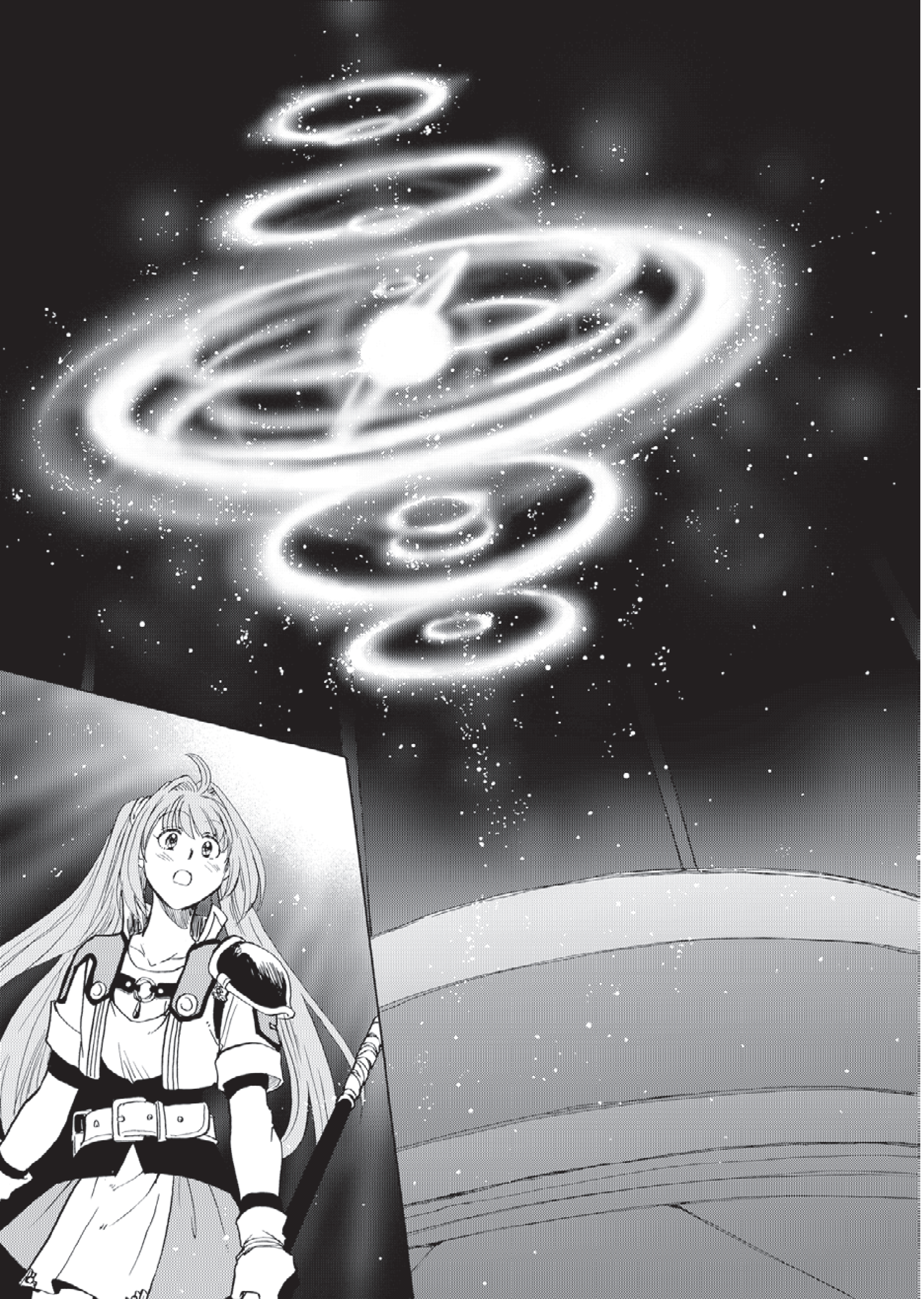

穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースIX」のキャラクターも参戦!
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る!
おまたせ!待望の第2巻だよ!
も〜っと集まれ!
ファルコム学園②
新久保だいすけ
定価:本体900円+税
ISBN 978-4-8021-3213-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©DAISUKE ARAKUBO ©2020 FIELD-Y
発行:フィールドワイ フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
発売:メディアパル ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks

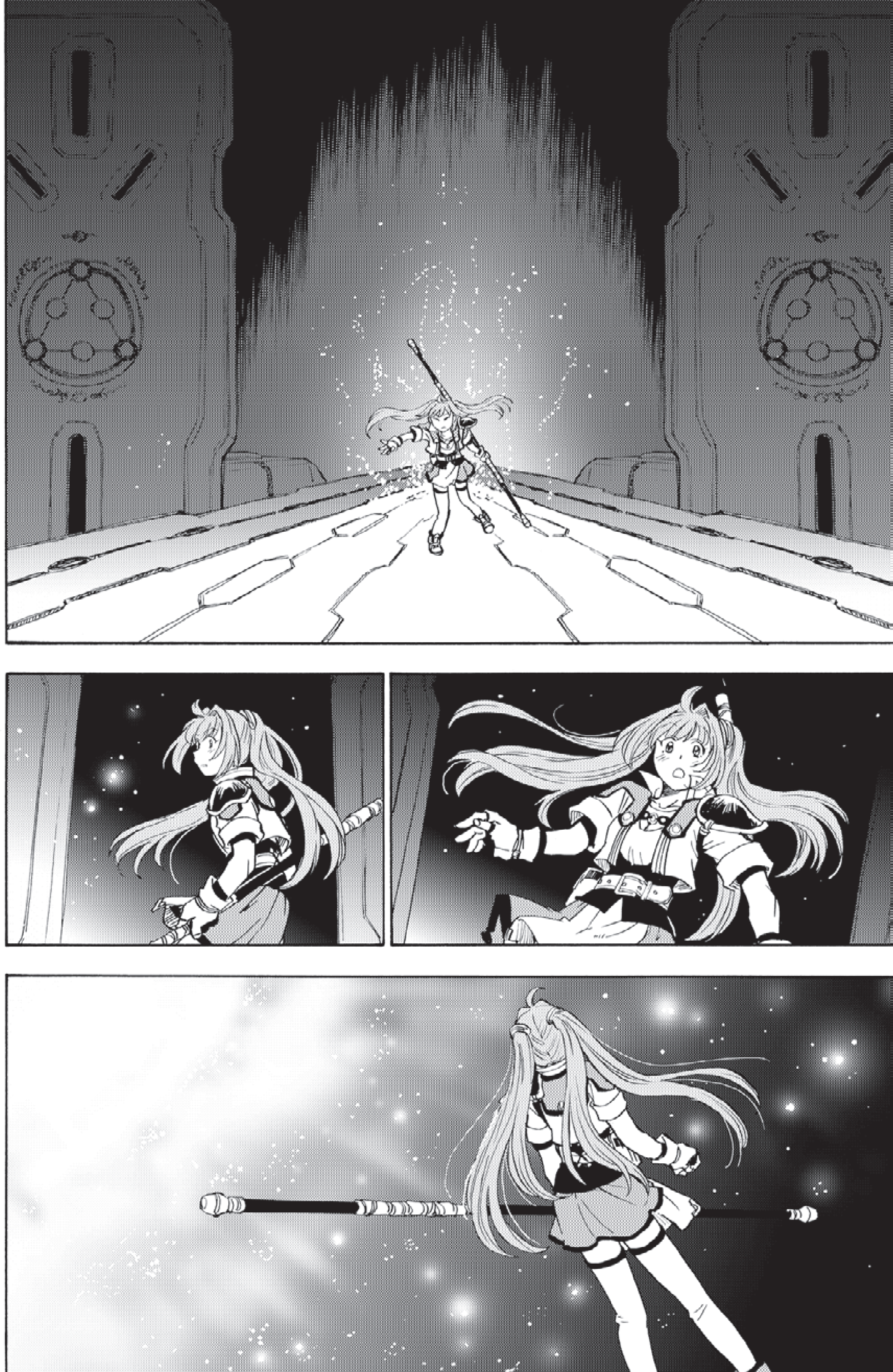

かつて私は壊れたヨシュアの心を修復するのに
《絶対暗示》による術式を組み込んだ
その時に刻んだ「聖痕」が
いまだ彼の深層意識に眠っていてね
働きかければたやすく身体制御を奪い取ってしまう
こんな風に
ヨシュア…!


とはいえ
君とともにこんな所まで来なければ私も再び手に入れることはできなかっただろう
感謝するよエステル君
ヨシュアを連れ戻してくれて
ふざけるんじゃないわよ!!
では退散させてもらうよ
《根源区画》で待っているから
ぜひとも訪ねてきてくれたまえ


ヨシュア！
待って！
ダッ
ヨシュア…


エステル！
ヨシュア！
き…消えた…
…どこ行っちゃったのあの子たち!?
《根源区画》で待つと言っていたが
しかしこりゃマズイなぁ
そこに《輝く環（オーリオール）》もあるって話だ
ならば僕たちも進むしかあるまい！
急げ
もう時間がない







◉フィールドワイ公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp/falcombooks



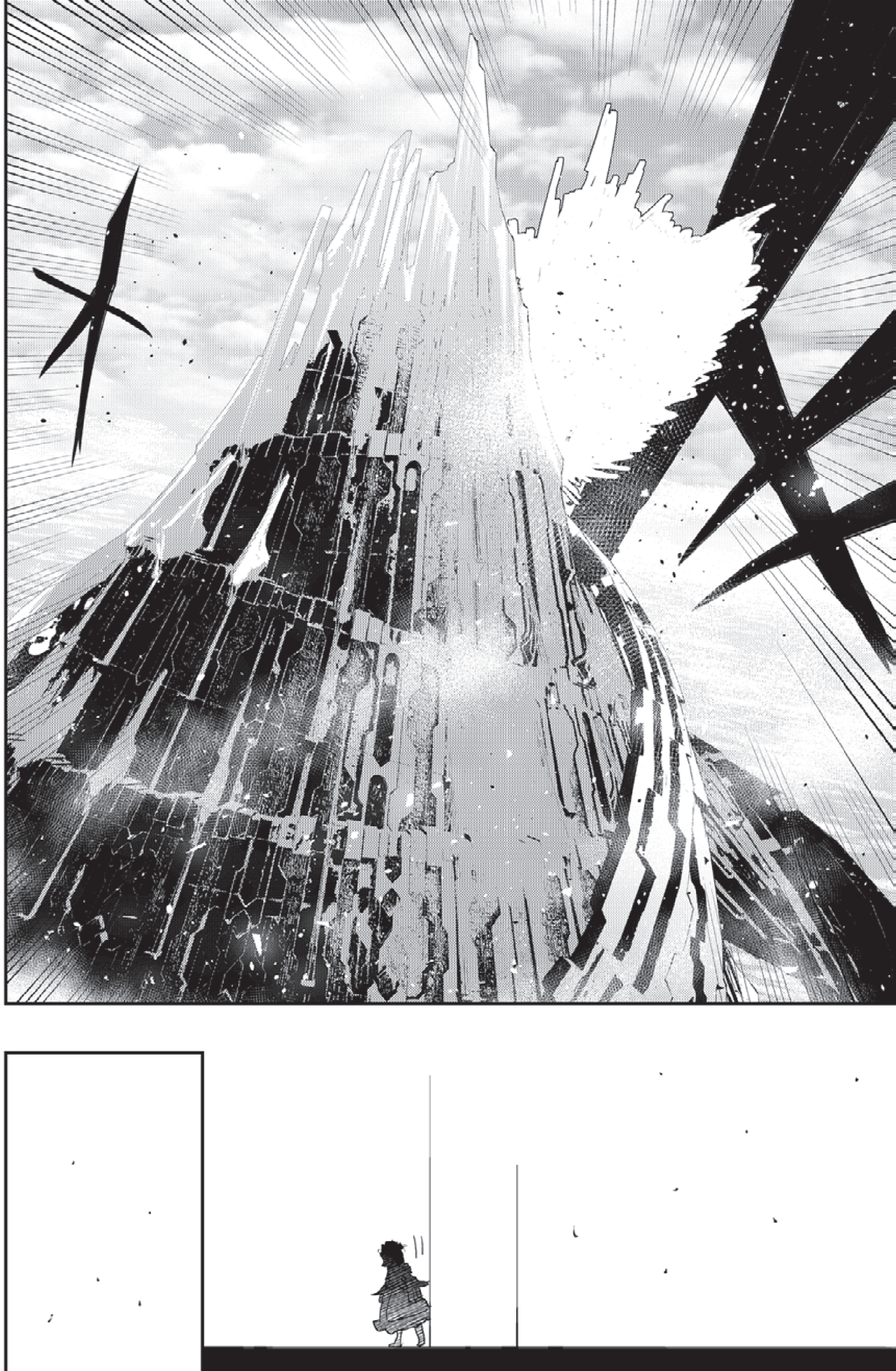
次回に続く

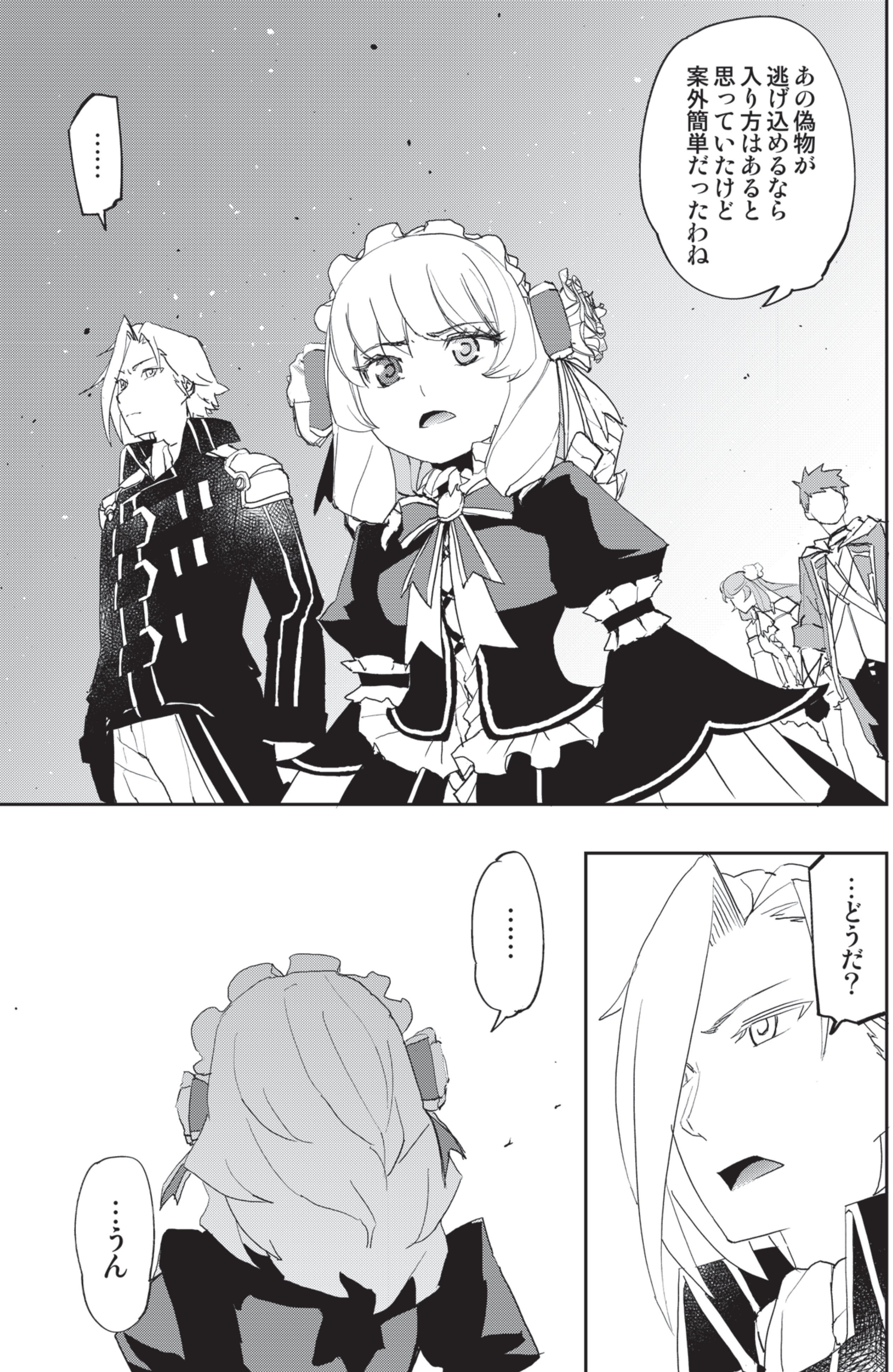

《逆しまのバベル》!!
かの巨塔のお披露目をもって
ここに

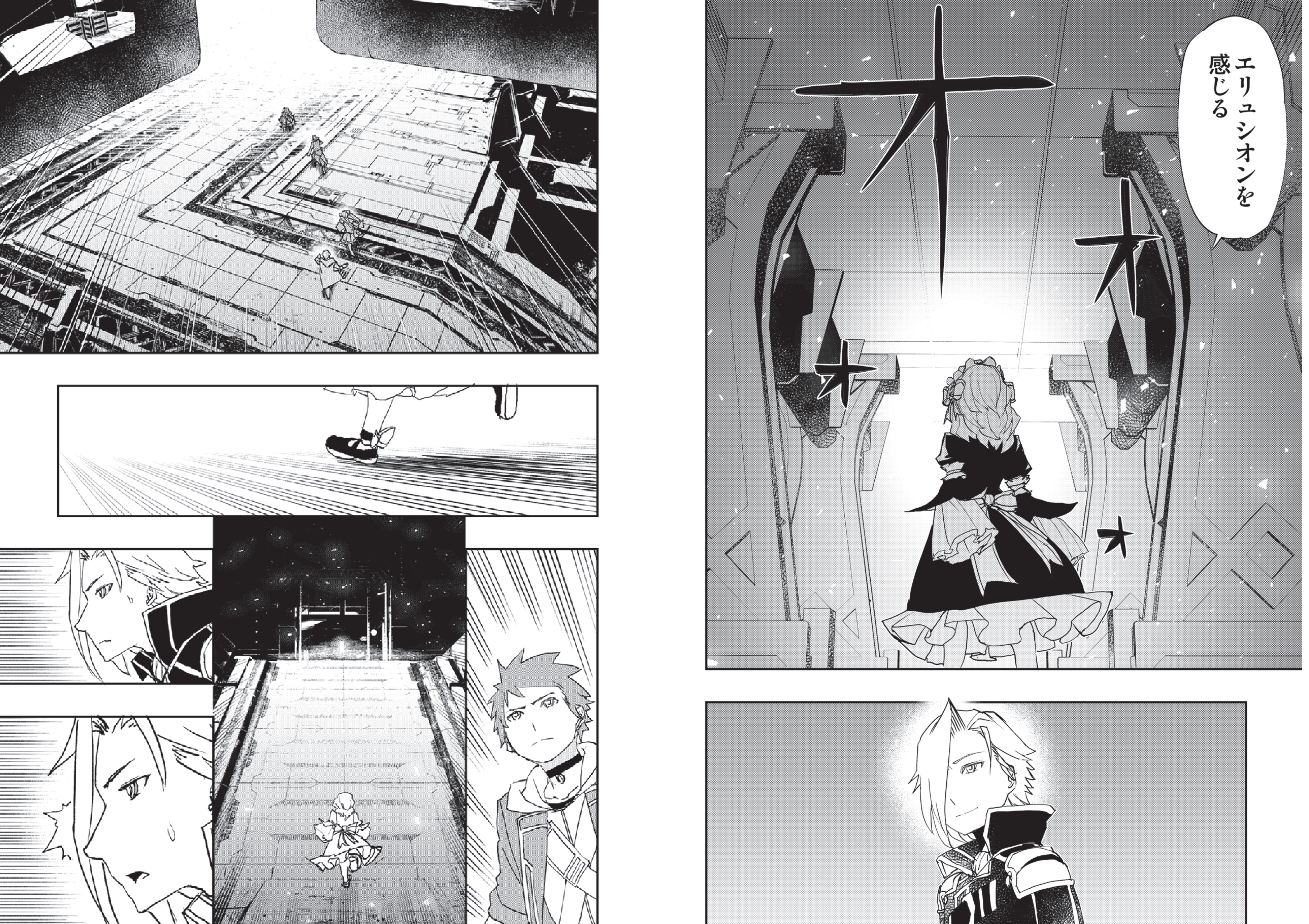

英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐!
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる!
激動のクライマックス!
発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks



ゼムリア大陸の統一を宣言する!!
THE LEGEND OF HEROES
創の軌跡
【はじまりのきせき】
THE MISERABLE SINNERS
漫画　墨天業
原作　日本ファルコム




あの偽物が逃げ込めるなら入り方はあると思っていたけど案外簡単だったわね
……
…どうだ?
……
…うん


エリュシオンを
感じる
オオォ


シャキッ


ルーファス！
エリュシオンに急げ!!
どちらが真の


〝ルーファス・アルバレア〟であるかを賭けて！
重層統制サーキット強制分離
メビウスモデルに介入…
第三 第六 第七…リンククリア
凍結処理並びに認証阻害 解除…
これでエリュシオンの隔離ができた…

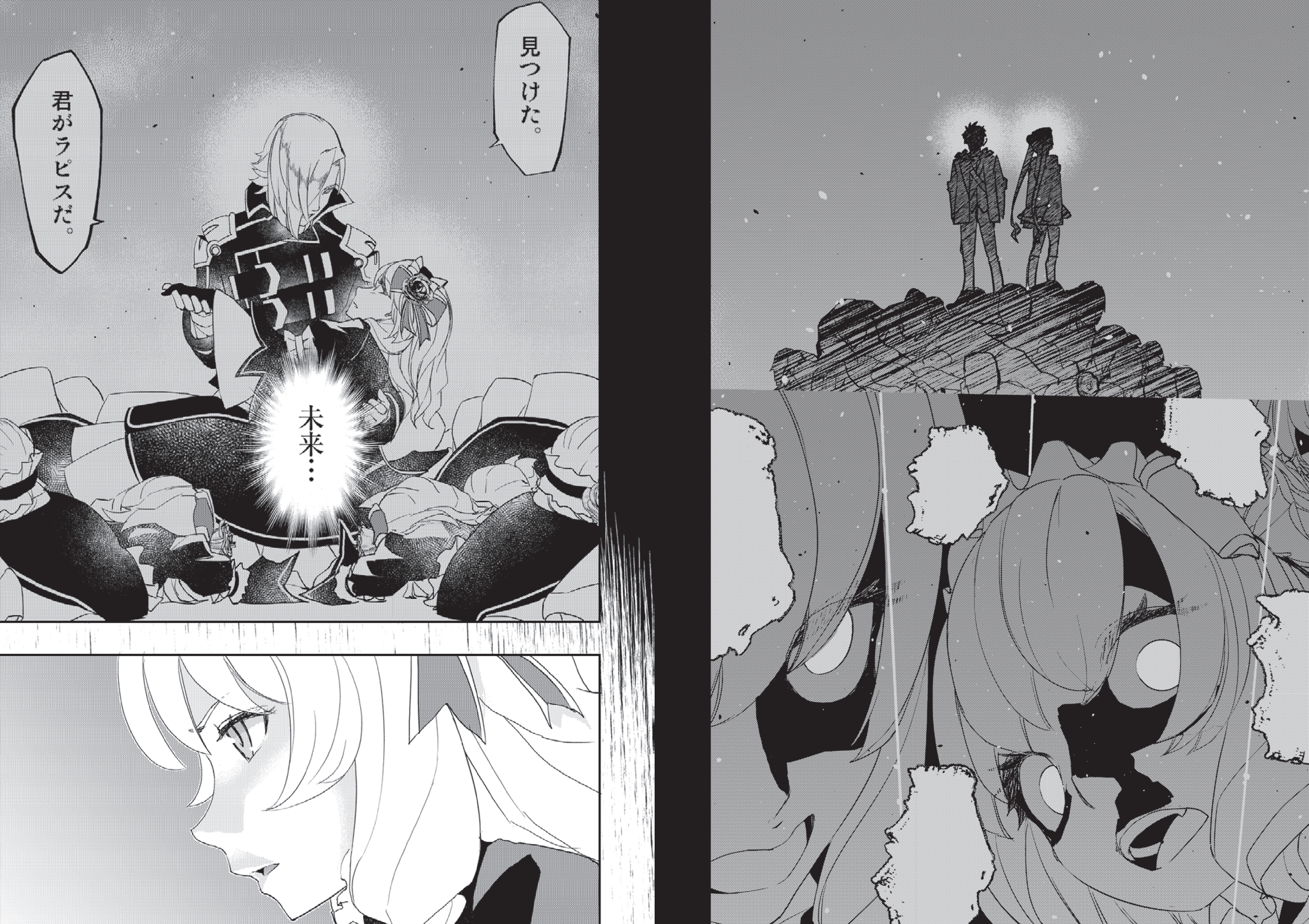


あなたは…


世界を
どうしたいの？


付き合ってあげるわ
光栄に思いなさい！
ここにたどり着くまで本当にいろいろあった…
—俺たちはヒトを殺さない
それでいいなら、
あんたに雇われてもいい
大切な人たち…


いないほどの
稀代の人形技師だったな
仲間…希望…


見つけた。
君がラピスだ。
未来……



◉フィールドワイ公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp/falcombooks



▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

工画堂スタジオが夏コミに出展！ファルコムコラボ新作グッズも販売!!

8月13日（土）、14日（日）に開催される『コミックマーケット100』に、工画堂スタジオが出展。ファルコムコラボの新作グッズも多数販売されます。さらに工画堂スタジオブースにおいて、ファルコムグッズのお買い物をしていただいた方に、1会計ごとにおひとつ先着で、来場者特典「ファルコム 黎の軌跡 紙製うちわ」を先着でプレゼント！

新作グッズ

LEDアクリルプレート（全3種）【受注商品】

イラストがプリントされた全面アクリルパネルと発光する背景アクリルパネルの2枚1組で、立体感と透明感を演出！背景がクールに光り輝きます。



＜会場予約特典＞ホログラムカード1枚（全3種）
※ご予約いただいた方に同一絵柄のカードをお渡しいたします。
※こちらの商品は受注生産となります。

価　格：各￥12,000
サイズ：A4程度
素　材：アクリル
付　属：LED台座

受注期間	発送予定
2022年8月12日（金）～8月31日（水）	2022年10月上旬より順次発送予定

「英雄伝説 黎の軌跡」トレーディングフィグム風クリアカード 水着3D ver. 単品販売（全8種）

その瞬間をフィルムにおさめたようなデザインのクリアカード。水着姿の一味違った夏らしいグッズ！



《Aセット4種》
（ヴァン／アーロン／カトル／ベルガルド）
￥1,200

《Bセット4種》
（アニエス／フェリ／リゼット／ジュディス）
￥1,200

価　格：1個￥300
サイズ：90×140mm

「軌跡シリーズ」ミニタペストリー（全5種）

閃の軌跡～創の軌跡までのイラストを使用したミニタペストリー！発色のいい高級感ある素材を使用したタペストリーです。



価　格：各￥2,200
サイズ：B2ハーフ
素　材：ディープホワイト

ゆるほわ♪ みっしぃぬいぐるみ【予約販売】

ゆるほわイラストのみっしぃぬいぐるみが、程よいサイズ感でとてもかわいいグッズになりました！



価　格：￥3,800
サイズ：約23cm

＜会場予約特典＞
ポストカード 1枚
※こちらの商品は受注生産となります。

受注期間
2022年8月12日（金）～9月30日（金）

発送予定
2022年10月中旬より順次発送予定

「イースシリーズ」ゆるほわ♪ チャーム第2弾（全7種）ランダム販売

アクリルチャームとしてもアクリルスタンドとしても使える2WAYアイテム。ぜひお好きな組み合わせて並べてください。



価　格：1個￥700／7個セット￥4,900
サイズ：高さ約70mm
素　材：アクリル

「イースシリーズ」ゆるほわ♪ 缶バッジ第2弾（全7種）ランダム販売

アクリルチャームとお揃いのイラストが大きめの缶バッジです。バッジには連結用の金具がついており、チャームやキーホルダーなどを連結できちゃいます。色んな組み合わせが楽しめるアイテムになっています。



価　格：1個￥400／7個セット￥2,800
サイズ：直径57mm

このほか、既存グッズも会場特価で販売！

工画堂スタジオ出展情報	コミックマーケット100特設サイト
工画堂スタジオブース（南1・2ホール No.231）	https://www.kogado.com/sw/male/news/c100_ac9n28/

MODEROID「《灰の騎神》ヴァリマール」2023年1月発売！

「英雄伝説 閃の軌跡」より、七体の騎神の一角「《灰の騎神》ヴァリマール」がプラスチックモデルで初立体化され、2023年1月に発売が決定しました。全高約165mm（頭頂高）、各部関節可動。交換用手首および専用武器・ゼムリアストーン製の太刀が付属し、ゲーム中の様々なアクションを再現可能。シャープな造形と各部装甲に施された細かな彫刻、そして複数の成形色と一部彩色済みパーツにより組み立てるだけで劇中イメージに近い姿に仕上がります。



商 品 名：MODEROID《灰の騎神》ヴァリマール
価　格：6,500円（税込）
発売時期：2023年1月
仕　様：組立て式プラスチックモデル・ノンスケール全高：約165mm（頭頂高）

予約期間
2022年7月22日（金）～9月7日（水）21:00

GOOD SMILE ONLINE SHOP（日本）	GOOD SMILE COMPANY（US）
https://goodsmileshop.com/ja/p/GSC_JP_04388	https://www.goodsmile.info/en/product/12941/

© Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.

7月の 新／衣装替えキャラクターをチェック！



水着・ユウナ

原作中では、ユウナらしい赤い水着を披露していたが、今回は爽やかなフレッシュグリーンでコーディネート！　活動的なユウナらしい出で立ちが夏にぴったりだ。

THE LEGEND OF HEROES 暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
夏真っ盛りの７月は、ユウナが水着姿を披露！　そして、メインストーリー終章第５弾も更新！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

メインストーリー終章第５弾「対決／後篇」実装！

ナハトたちは《戦争卿》が向かったと思われるマグマだまりの洞窟に近づいていた。
そしてついに邂逅する試験班と《戦争卿》一派。
“未来”を守るための対決が始まる——









※画像は開発中のものです。　※ 上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

© Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.　© USERJOY JAPAN Co., Ltd. All Rights Reserved.　© USERJOY Technology Co., Ltd. All Rights Reserved.

特務支援課メンバーが過ごす
クロスベル自治州のゆる～い(?)日常！

英雄伝説 零の軌跡
～午後の紅茶にお砂糖を～

第4回



©YUKIYA MURASAKI, KUBOCHA

エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、『碧の軌跡』シリーズ。続編となる『閃の軌跡』、『創の軌跡』においても激動の中にあり、様々な壁が立ち塞がっていたが、怯むことなく立ち向かっていったのがロイド・バニングス率いる特務支援課メンバーだ。そんな特務支援課メンバーが、もしかしたら過ごしていたかもしれない日常を描く、魅力たっぷりの一冊をご堪能あれ！

製品情報
好評発売中
著　：むらさきゆきや
イラスト：窪茶
定　価：1,210円（税込）



旧市街、プールバー《トリニティ》——

地下にあるいかがわしい雰囲気の店だった。

以前、来たことがあるが、あのときはロイドたちと一緒だった。

今はノエルひとりだ。

腰掛けたソファーの対面にワジが座っている。

彼の背後にはスキンヘッドで巨躯の男が立っていた。

そして、遠巻きにしているが、そろいの青装束をまとった男たちがこちらを見ている。

彼らこそ本物のテスタメンツだろう。

緊張する。

「……」

「ふふ……まさか、ここまでついて来るなんてね。ノエル、君って意外と迂闊じゃない？」

「一応、ワジくんを信用してるから」

「へえ？　そんなに僕と親しかったっけ？」

「そうね……正確には、あたしが信用してるのは、ロイドさんだと思う」

「ふぅん、なるほどね」

「ワジ君に多少の問題はあるかもしれないけど、あのロイドさんが信用している人なのだから、あたしも信用しようと思う」

「……ただの考えなし、というわけでもないか」

「あの人たちを逃がした理由、教えてくれないかな」

「ＯＫ」

ワジが指を鳴らすと、テスタメンツのひとりがワインとグラスを持ってきた。

手慣れた様子でグラスにワインを注いでいく。

「ちょっと君、未成年でしょう!?」

「前にも言っただろ？　ノンアルコールさ」

「し、信用できません！」

「……今、僕を信用してるって言ったばかりじゃないか……ほら、君も試してみたら？」

「う……」

ノエルは差し出されたグラスを受け取りはしたものの、口はつけなかった。
「さて、連中に関してだけど……これはアッバスのほうが詳しいかな」
話を振られ、ワジの背後にいる大男が口を開いた。意外にも落ち着いた口調で、まるで神父のようだ。
「三ヶ月ほど前のことだ。彼らはテスタメンツに入りたいと言ってトリニティにやってきた。ちょうどワジは留守にしていたが、そもそもテスタメンツはワジを信望するメンバーが集まって自然とできたもの……入るのも出るのも、決められたルールは存在していない」
「それじゃ、彼らはメンバーの一員なんですか？」
「いや。いくらルールはないといっても、不適格な者であれば、俺が入団を拒否している」
「え？　でもワジ君がテスタメンツのヘッドのはずじゃ……」
「チームのことはアッバスに任せてるからね」
「そ、そうなんだ……」
不良グループのイメージからは遠いけれど、そんなこともあるのかもしれない。
アッバスが話を続ける。
「俺の見立てでは、あの者たちは表で恭順を示しながら裏で悪事を働くような輩に思えたのでな」
「ちょっと会っただけで、そんなことまでわかっちゃうんですか⁉」

「その後、街で恐喝をすることまではわからなかったがな」
アッバスは口を閉ざした。
テスタメンツのメンバーから渡されたメモを見ていたワジが、話の後を継ぐ。
「まぁ、そんなわけで……彼らはテスタメンツってわけじゃないけど知らん顔もできないからね。この件は僕たちが始末する。警察や警備隊はお呼びじゃないのさ」
本来ならば、当然、警察に通報するべきだろう。
しかし、彼らは街の不良グループだ。そんな理屈が通じるはずもない。
「あれ？　でも、おかしくない？　それなら、なおさら逃がした理由がわからないんだけど……」
「群れないと悪さもできない小物たちが、テスタメンツを騙ってメダルの押し売りなんて、ちょっと巧妙すぎると思わない？」
「あ……言われてみれば……」
「黒幕がいるのさ。そいつは街の不良を使ったり、以前のマフィアのルートを利用して、ずいぶん強引にミラを掻き集めてるみたいだ」
聞き捨てならない言葉が飛び出して、ノエルは身を乗り出した。
「マフィアのルート⁉」
「もう、個別の事件については警察が動いてる。特務支援課にも要請が行ってるみたいだ

よ?」
「なっ⁉」
警察の一部署である特務支援課への要請が、こんな不良グループに流れているなんて驚きだった。
あとでフランに伝えておかなければ、と思う。
ワジがグラスを傾ける。ルビー色の液体が形のいい唇を濡らした。
「ふふ……おしゃべりはおしまいだよ。これから僕は用事がある。さあ、お客様がお帰りだ」
彼がソファーから立ちあがる。
同時に、テスタメンツのメンバーたちがノエルに近づいてきた。
まるで教主に従う信徒のようだ。
先ほどの長髪の男たちとは全く違う不気味な威圧感。
「くっ……事情を知った以上、あたしだって見て見ないふりをすることはできない!」
「ワジの言葉は絶対だ。ここは帰ってもらおう」
「きみ、ボタンが取れかけてる!」
「え?」
ノエルに手を伸ばそうとしていた青年が、あわてて胸元を確かめる。
「そっちのきみはリストバンドが緩んでる! 制服を着るなら、きちっと着なさい!」

「や、Ja（ヤー）.」
もうひとりのメンバーも、ノエルに気圧された。
このまま黙って帰るわけにはいかない。
「ワジくんの〝用事〟って、その黒幕に絡んだことだよね? それなら、あたしも行く。このまま放っておくなんてできないもの!」
「やれやれ、そのクソまじめな性格、誰かさんを思い出すね。これは、なにを言ってもムダかな?」
「ちゃんと戦力になるから」
「その格好でかい?」
「非番だけど、緊急招集に備えて最低限の装備はもってきてる」
ノエルはバッグからサブマシンガン（ラピッドフレイム）を取り出した。
びしっ、と見せつける。
ところが、ワジが肩を揺らして苦笑した。
「いや……そういうことじゃなくてさ。ふふ……アッバス、こちらのお姉さんに服を用意してくれるかな?」
「いいのか?」
「まぁ、女性が同伴してるほうが警戒されにくいしね」

ノエルの頭に『?』マークが飛んだ。
てっきり黒幕の居場所に乗りこむのだと思っていたのだが、違うのだろうか。
「僕の見立てでは、84、60、86でDってところかな」
「え？　あっ⁉　ちょっ……えええっ⁉」
ノエルは思わず胸元を両手でかばった。ちゃんと服を着ているのに、まるで裸にされたみたいに恥ずかしい。
「その反応は当たりみたいだね」
「ふむ、ではすぐ用意しよう」
淡々とアッバスがうなずく。
「な、なに？　服って、どういうこと⁉」
「ふふ……最高級のレストランに入るなら、ドレスは当然じゃないか」
ワジが貴婦人をエスコートするホストの笑みを浮かべた。
そういえば、彼の副業は……

歓楽街――

ノエルたちはクロスベルが誇る最高級レストランのひとつ《プレミアム》の前にいた。
細長い塔のような建物が全てＶＩＰをもてなすための店になっている。
夜の街で窓明かりに照らされ佇む、蒼い正装に身を包んだワジは、まるで物語の世界からやってきたかのようだった。
「ヒールは低めにしたけど、慣れないかな？」
「え？　あ、うん……それに、このひらひらしたのが……」
ノエルに用意されたドレスはピンク色で、フリルスカートはかわいらしいが、胸元も背中も開いた艶っぽいデザインだった。
恥ずかしくて外に出られない、と半泣きになっていたら、ワジが白いファーショールを羽織らせてくれたのだ。
一応、気遣われているのかもしれない。
上等な絹に、本物の毛皮。
形のいいリボンと、揺れるフリル。
――こんなの、フランだったら似合いそうなドレスだけど、あたしには似合ってないだろうな――とノエルは、こっそりため息をついた。
「レストランに入れば、しごく当然の格好さ。あまり恥ずかしがってると目立っちゃうよ？」
「そ、そうだよね……」

ノエルは警察官ではないが、これは潜入捜査のようなものだ。おどおどして犯人に警戒される新米みたいな失敗はしていられない。
小さなバッグに納めた銃の重みを確かめる。
「大丈夫……行こう、ワジ君」
「……へえ、仕事をする顔つきになったね」
ワジに連れられて、ノエルは《プレミアム》の四階を訪れた。
黒を基調とした内装。
意外と柱が多く、テーブルのほとんどに視界が通らない。
個室のように区切られてはいないのに隣の客と目が合うことはない。そんな造りだった。
店の奥にはグランドピアノが置かれ、綺麗な女性ピアニストが静かな曲を奏でている。
「見てごらん、奥のほう」
「ピアノの横？」
黒色の扉があった。
「ああ……詳しいことは、テーブルで話そうか」
「うん」
「足元が暗いから、気をつけて」
すっと、左手を取られる。

ごく自然な動作なものだから、思わず手を預けてしまった。
「あ……」
今さら急に離したら、変に目立ってしまうだろうか。
うつむく。
いつもノエルは警備隊で戦闘をこなしているから。
女性らしいすべすべした肌ではない、と思われやしないか、気になってしまった。
まさか尋ねるわけにはいかないけれども。
「うぅ……」
ウェイトレスに案内されて、ノエルたちは入口近くの席に腰を下ろした。
このテーブルも他から柱の陰になっている。
「ピアノの横にドアがあったろう？」
「うん」
「あの先がVIPルーム。今回の事件の黒幕は、そこにいる」
「え⁉　どうして、そこまでわかってるの……？」
「街で悪さをしてる小物たちが、僕に締め上げられたんだ。当然、ボスのところへ行って、こう尋ねるだろう。〝ワジに目をつけられた。どうしたらいい？〟ってね」
「そのために、彼らを逃がしたの⁉」

つうっ、とワジが人差し指をノエルの唇に触れた。
「レディが……大きな声を出したらだめだよ?」
「ご、ごめん」
マナー違反でもあるが、そもそも目立ってしまってはいけない。そのうえ、唇に指先で触れられて、ノエルは恥ずかしさに顔が熱くなった。
きっと耳まで赤くなっているに違いない。
ウェイトレスが注文を取りに来た。
ワジがメニューも見ないで料理を選び、すらすらとワインまで注文する。
「ちょっと、ワジ君……」
「目立たないほうがいいだろ?」
「ぐっ……」
さすがのノエルでも、ここで言い争うほどバカではない。飲まなければいいだけだし、犯人たちに気づかれないほうがいい。
店員が一礼して立ち去り、またふたりきりになる。
「ふふ……さしずめ、若いホストと、初めてホスト遊びをする良家のお嬢さんってところかな?」
「はぁ!?」

「僕がホストだってことは、店の者たちは知ってるし。そう思われてたほうが好都合だろ?」
「う……ま、まぁ……」
「それで、さっきの話の続きだけど――」
「だいたい、わかったわ。ワジ君は、わざと逃がして仲間に後をつけさせたんでしょ?」
「正解」
「そして、あたしと話してるうちに、その仲間が戻ってきてメモで報告したんだよね」
「へえ? メモを見てたことに気づいてたんだ。なかなか、やるじゃない」
「ソーニャ副司令の薫陶(くんとう)を受けてるから」
「タングラム門の副司令か。聞いたことはあるよ、有能らしいね」
「そりゃもう、実質的に警備隊のトップと言ってもいいくらいだし」
「今度、司令に就任するらしいじゃない」
「えっ!? まだ一般への情報公開はしてないのに!?」
「ふふ……でも警備隊のなかでは発表されてるだろ?」
「それは、まぁ……あ、言えないよ」
ウェイトレスが前菜(オードブル)を運んでくる。お皿の絵が透けるほど薄く切られたハムが乗っていた。
ノエルは目をしばたたく。

「これが高級なんだね……警備隊の食堂だと、お皿にどっさり盛られてるんだけどな……すごく高いのに量が少ないなんて、ちょっと不思議な感じがする」
「食べてみれば、肉の魅力が量と歯ごたえだけじゃないってわかると――」
　ワジが声を潜めた。
「……出てきたよ」
「ッ⁉」
　柱と柱の合間から見覚えのある長髪と、その仲間たち――三人組の姿が見えた。
「ビンゴ。報告は正確だったね」
「なんとか隙を見つけて捕まえないと……」
「いや、僕たちのターゲットは、ＶＩＰルームの中のほうさ。小物はアッバスに任せよう」
「来てるの？」
「ぞろぞろ大勢で動いたら目立つから、僕たちの後から来て、このビルの外で待機する手筈になってる」
「そうなんだ……ワジ君もだけど、あのアッバスさんも、とてもただの不良とは思えないんだけど」
「ふふ……そうかい？」
　三人組がテーブルのそばを通り過ぎ、そのまま店の外へと出て行く。

　気づかれないよう、ノエルたちは前菜を食べて客のふりをし、やり過ごした。
「ふぅ～、行ったみたいね」
「前菜（オードブル）、なかなか美味しかったろ？」
「う……舌のうえでとろける肉があるなんて知らなかったわ。これは、ちょっとダメかも」
「おや？　お口に合わなかったかい？」
「しばらく他のハムが食べられなくなっちゃいそう」
「ふふ……次はスープ、その次は魚料理が出てくると思うよ」
「そうなんだ。はぁ～……他の料理も食べてみたいけど……そういうわけにはいかないものね！」
　ノエルは苦笑しながらバッグを手に取る。見た目に反した重みが、今は心強い。
　肩をすくめてワジが席を立った。
「――じゃあ、行こうか」
「ええ！」

　ワジが顔見知りのウェーターに耳打ちし、店から人払いするよう言いつける。

ノエルはバッグからサブマシンガンを取り出し、ピアノの近くにあるドアを引き開けた。
踏みこむ。
「全員、動かないでください！」
室内の者たちへと銃を向けた。
中央にテーブルがあり、酒瓶がならんでいる。左右向かい合わせのソファーに、四人の男たちが座っていた。
黒ずくめの格好をした男たちが、驚愕に目を見開く。
「なっ⁉　なんだ、てめえら⁉」
「警察か⁉」
「うわぁ、う、撃つな！」
「チッ……あのガキども、つけられやがったか……」
腰を浮かしかけた相手にノエルは銃口を向ける。見覚えのある連中だった。
「あ、あなたたちは！」
「おや、知り合いかい？」
一緒に部屋に踏みこんだワジが、意外そうな声で訊いてきた。
ノエルは視線を犯人たちから外さず、うなずく。
間違いない。

「ええ……先日、古戦場でね」
黒ずくめの一人が気づいたようだ。
「もしかして、おまえ……あのときの警備隊か⁉」
「そうです。魔獣から助けてあげたのに、無視して逃走したのはあなたたちですね？　今度こそ、じっくり事情を聞かせてもらいますよ⁉」
ワジが小首を傾げる。
「この連中は、マフィアのルートを使ってミラを集めてるらしいけど、そのとき警備隊に見つかったのかな？」
「おそらくね……珍しい魔獣をコレクターに売るブローカーじゃないかって、ソーニャ副司令は言ってた」
「魔獣を？　それは妙な商売をはじめたものだね。ふむ……もう他の裏組織が台頭してるから、まともなルートが残ってなかったのかな」
チッ、と黒ずくめのひとりが舌打ちする。
「よく知ってるじゃないか……ワジ」
「君の名前は知らないけどね」
「俺はドゥッチオだ。まぁ、覚える必要はないがな……例の一件のせいでルバーチェ商会（うち）は力を失い、ほとんどの取引先は黒月（ヘイユエ）に押さえられちまった……だから俺たちは、工夫し

てミラを稼ぐことにしたわけさ」
「工夫？　無茶の間違いじゃない？　荒っぽい稼ぎ方だよね。警察に目をつけられ、警備隊と揉めて……ぜんぜん長く続ける気はないって感じだ。短期間で資金をためて外国に高飛びってとこかな？」
「なんですって⁉」
　ワジの洞察に、ノエルはもちろん、ドゥッチオたちも驚いていた。
「チッ……頭の回る面倒な野郎だ！　そのとおり、だから、俺の名前は覚える必要がないのさ。帝国へ行ったら変えるつもりだからな！」
　周りの黒ずくめたちから笑いがもれる。
「くくく……そうだな。帝国人らしい名前がいい」
「ギリアスってのはどうよ、大物になれるかもな！　ハハハ」
　ノエルは不審に思った。
　不良グループのヘッドであるワジがいて、銃を構えた警備隊の自分がいる状況で、なぜ彼らは落ち着いていられるのだろうか。
　切り抜ける策があるというのか。
　それは、いったい？
　ドゥッチオが胸元に手を置いた。

「ここには、導力通信機を改造したスイッチが入ってる……何に使うと思う？」
「仲間でも呼ぶつもり？」
「くくく……そんなものはいない。こいつは、爆弾に繋がってるんだ！」
「爆弾⁉　いったい、どこに……⁉」
「この建物の中さ！」
「そんな⁉」
　高級ホテル《プレミアム》には、大勢の重要人物が訪れている。
　もしも、爆破されて死傷者が出たら、大変なことになるだろう。
「俺たちはかまわないんだぜ？　ちょいと上のほうのフロアが吹っ飛ぶだけさ」
　ドゥッチオが胸元から、スイッチを取り出す。手に握れるていどの黒色の筒に赤いボタンがついていた。
　獣のような笑みを浮かべる。
「どうする？　その銃で俺を撃ってみるか？　もしかしたら、はずみでボタンを押しちまうかもしれねえけどな！」
「くっ……」
　ノエルは市民の安全を守る警備隊員だ。警察官と管轄こそ違うものの根底は変わらない。いや、どんな立場であろうと変わらないだろう。

犯人を捕まえるために誰かの命を犠牲になんてできない。
ノエルは銃をおろした。
「ううぅ……」
「もしかして、また逃がすのかな？」
ワジが肩をすくめる。
ぐっとノエルは歯がみした。
「人命は最優先だし、この状況じゃ……」
「まぁ、そうだね。今回は下調べが足りなかったかな。まさか、ホテルに爆弾をしかけてるなんてね」
武器は持っていなかったワジだが、降参の証に両手を軽く挙げた。
ドゥッチオたちが哄笑する。
「ふはは！　好い様だな！　警備隊員とテスタメンツのワジが言いなりとは！」
下衆な物言いに、ワジが眼光を鋭くした。
「べつに僕はホテルを爆破されてもかまわないよ？　君たちが破滅を望むならね。このお姉さんに絶対に従わなければいけない理由はないんだし？」
「ぐっ……」
ドゥッチオたちが気色ばむ。

ノエルは眉をひそめたが、彼の立場ならホテルの従業員や宿泊客より、相手を捕らえることを優先しても不思議はない。
「ワジ君……」
「わきまえてるよ。彼らが紳士的なうちは、ね」
「ふんっ。まぁ、いい……行くぞ」
ドゥッチオが立ち上がる。
他の黒ずくめたちが、「移動するのか？」と尋ねる。
「ああ、警備隊だの不良だのに乗りこまれたってことは、他の連中にも見つかってる可能性が高いからな」
「なるほど。まずいな」
「よし、移動しよう」
「もうミラも充分あるしな！」
他の者たちはともかく、リーダー格のドゥッチオという男は頭が切れるようだ。
スイッチを見せつけるようにして命令してくる。
「ゆっくりと部屋を出るんだ。おかしな真似をしたら……わかってるな？」
「言われなくとも……」
「君こそ、うっかりで押さないでくれよ？」

「減らず口を叩くんじゃねえ」
ＶＩＰルームを出ると、ピアノの演奏をしていた女性も、店員たちの姿もなくなっていた。
ワジの言葉に従い、みんな逃げたようだ。もちろん客もいない。
「くそっ！　店の連中、ふざけやがって！」
ドゥッチオが苛立たしげにテーブルを蹴飛ばす。派手な音をたてて倒れ、ガラス板が砕け散った。
ノエルは厳しく叱りつける。
「なんてことするの⁉」
「うるせえ！　早く行け！」
「くっ……」
廊下に出て、エレベーターに乗る。
黒ずくめはレストランの地下へと向かうボタンを押した。
かすかな浮遊感。

ジオフロント――
最高級レストラン《プレミアム》の地下には、駐車場が広がっていた。
ノエルは思わず感嘆をもらしてしまう。
「ふぁ～、すごい……雑誌でしか見たことないような高級導力車が……わわっ！　ラインフォルト社のフラグシップ・スポーツカーに、あっちはヴェルヌ社の限定モデル⁉　ジオフロントに、こんな区画があったなんて……」
「おい、早く歩け！」
苛立たしげにドゥッチオがスイッチを見せつけ、命令してくる。
ワジが鼻で笑った。
「ここに魔獣を輸送するためのクルマがあるのかな？」
「……ふん、そういうことだ」
駐車場の一角に、黒色のトラックが駐まっていた。
後ろを向けているから目立たないが、前側（フロント）に古戦場のゲートを破ったときの傷が残っている。

「僕たちを連れてくる必要はなかったんじゃない？」
「あいにく、俺は用心深いんだ。爆弾のことを知られてから、お前たちを自由にしたら、どんな対処をされるかわからないからな」
「なるほどね」
「お前ら以外にも、俺たちのことを嗅ぎ回ってる連中がいるようだからな……ベルガード門に向かうまで、念のため人質になってもらうとしよう」
　ドゥッチオ以外の黒ずくめたちが大きめの鞄から機関銃を取り出した。
　三人ともがワジへと銃口を向ける。
「くくく……だが、人質は一人で充分なんでな」
「へぇ、そうかい？　――やってみなよ」
「余裕ぶってんじゃねえぞ、ワジ！　おまえの仲間はホテルの外だろうが！　こんなところに助けに来るやつはいないぜ⁉」
「くくく……」
「あばよ、ワジ！」
　三人が銃の引き金を引こうとする。その前に、ノエルは立ちはだかった。
「やめなさい！　そんなことはさせません！」
　一番驚いたのはワジだった。

「ノエル⁉　どきなよ、彼らは冗談で銃を構えてるわけじゃない」
「あたしだって、冗談でこんなことしてるわけじゃない！　警備隊の一人として、あたしがクロスベル市民を守ります！」
「……僕、不良グループのヘッドなんだけど」
「そんなの関係ないでしょ！　ワジ君が、たとえ不良だとしても、クロスベルの市民であることに違いはないんだから！」
「そう……そうだね」
　ワジが微笑んだような気がしたが――背後のことだったので、その表情を見ることはできなかった。
　ノエルは黒ずくめたちを見据える。
「どうしても人質をひとりにしたいなら、あたしを撃ちなさい！」
「チッ……うるせえ女だ……いいだろう！　そんなに死にたいなら、おまえが先だ‼」
　男たちが引き金に力をこめる。
「くっ……」
　ノエルは目を閉じた。
　最初に浮かんだのはフランと母親の顔――そして、警備隊の制服をまとった亡き父の後ろ姿。

ソーニャ副司令と、タングラム門の仲間たちの表情。つらい訓練の日々。充実した毎日。
――初めて警備隊に配属された誇らしい気持ち。あの日は、まだ警察学校の生徒だったフランがお小遣いを奮発してクロスベルで一番大きなケーキを買ってきて、母親と三人では食べきれないと思っていたら、近所の人たちや日曜学校の頃の友だちまでお祝いに来てくれて……

みんな、ごめん……

ノエルの体が、背後から引っ張られた。
「ふわっ⁉」
ワジが腰に左腕を回してきて、抱き寄せられるような格好になる。
彼が右手を、黒ずくめたちへと突き出した。
静かに宣言する。
「やらせるわけにはいかない……はぁぁぁぁぁ……‼」
呼気と同時に、魔法とも闘気とも違う、不思議な輝きが彼の体から発せられる。
まさに銃を撃たんとしていた黒ずくめたちが、呼吸すらも止めてしまったかのように身じろぎもせず立ちつくす。



「ううぅ……な、なんだ……⁉」
それほどの威圧感にもかかわらず、ノエルは温もりさえ感じられる。
「こ、これって……？」
「ぐうううぅ……ワ、ワジィィィ！　爆弾が、どうなってもいいってのか⁉」
ドゥッチオがスイッチを振り上げた。
ノエルは悲鳴にも似た声をあげる。
「だめぇぇぇぇ‼」
そのとき、駐車場の奥から駆けてくる足音が響いてきた。
青と白のジャケットを着た、ブラウンの髪の青年が走ってくるのが見えた。
「あ……ああ……」
ノエルの視界が涙で歪む。
彼の仲間——パールグレイの髪の少女と、赤髪の青年。そして、魔導杖（オーバルスタッフ）を構えた少女も一緒だ。

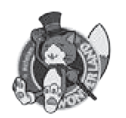
「……ロイドさんっ……‼」

ノエルが感極まった様子で名前をつぶやいた。
うなずきを返す。
エリィが拳銃（ロストキャンベル）を構え、ランディがスタンハルバード（テスタロッサ）を突き出した。
ティオが導力杖（フローレンティン）を黒色の導力車に向ける。
「ロイドさん、このトラックです。警備隊から捜索要請のあった導力車とデータが一致しました」
「よし、ようやく見つけたな」
一歩、前に出る。
「ノエル曹長、ワジ……どうしてここにいるのかは、わからないが……どうやら間に合ったみたいだな？」
ワジがいつものクールな笑みを浮かべて、両手を広げる。
「ナイスタイミングだよ、ロイド」
「はぁ〜」
脱力しかけたノエルだったが、表情を引き締める。
「あっ、ロイドさん！　ホテルに爆弾が！」
「くくく……そういうことだ、特務支援課！　さんざん世話になったがな。この場でまとめて始末してやるぜ！」

ドゥッチオがスイッチを突き出して叫んだ。
ティオが得意げに笑みを浮かべる。
「導力通信を使った爆弾ですか。たしかに、物理的には巧妙に隠されてましたが、導力ネットワーク側からは丸見えでしたね」
「な、なに……？」
「レストランのシステムと無関係に追加されていましたから。あれでは、わざわざ爆弾の位置を知らせる案内板を用意したようなものかと」
「……ッ⁉」
ドゥッチオがスイッチを押した。
カチン、と乾いた音が駐車場の奥へと消えていく。
爆発音はしなかった。
何度も何度もスイッチが押される。
「ばかな！　ばかな！　見つけられたとしても簡単には解体できない爆弾のはずだ‼」
ランディがくたびれた顔をして、肩をまわした。
「まあ、火薬の扱いは、それなりに慣れてるんでな。ひさしぶりだったけど、たいして時間はかからなかったぜ？」
「なっ……⁉」

ドゥッチオが絶句し、ワジがヒュウと口笛を鳴らす。
「やるじゃない」
「よかった……本当によかった……」
声を震わせるノエルの瞳には涙が浮かんでいた。
ロイドは前に出る。
「古戦場ゲートの器物破損、警備隊による停止命令の無視、ならびに、恐喝事件関与の疑いで、逮捕する！」
「くそがぁ‼」
ドゥッチオがスイッチを投げ出す。
そして、トラックの後部ハッチに飛びついた。ロックが外される。
飛び出してきた黒い影は、二足歩行する巨大なトカゲのような魔獣だった。
キシャアアアアァァァァァァァァァー‼
咆哮に、ティオが目を見開く。
「気をつけてください！　ブレードファングです！」
魔獣を放ち、その隙に黒ずくめたちが逃げようとする。
エリィの銃弾が、その目論見を防いだ。
遠くから撃ちこまれた一撃が、エレベーターのスイッチを破壊したのだ。

「逃がすものですか！」
「くそっ！　おのれ……こうなったら、まとめて始末してくれる‼」
「うおおおぉぉぉ～～～‼」
　ドゥッチオたち四人が機関銃を構える。
　魔獣が獰猛な雄叫びをあげ、鋭い牙のならんだ口を開き、飛びかかってきた。
　ロイドは武器(オールラウンダー)で迎え撃つ。
「行くぞ、みんな！」
「わかったわ！」
「OKです！」
「アイサー」
　ノエルとワジも、それぞれが武器を取った。
「援護します！」
「やれやれ……」



ロイドたちはノエルやワジの支援もあって、魔獣を撃破し、ドゥッチオたちを捕らえることができた。
　犯人たちは床でのびている。
　ロイドは警察本部に連絡を入れて、護送車を回してもらえるよう手配した。
「――はい。よろしくお願いします」
　エリィが拳銃をホルスターにしまい、ランディがスタンハルバードを床につく。
「ま、こんなもんかね」
　ワジが服のほこりを払い落とした。
「それじゃ、ロイド……そろそろ、僕たちは行かせてもらうよ」
「え？　そうなのか？」
「せっかく君に会えたのに、名残惜しいけどね……僕たちは、ただレストランで食事をしていただけさ。そうだろう？」
　話を振られたノエルが、悩んだふうに眉を寄せる。
「うーん、でも警察の調査に協力するべきだと思うし……」
「その格好で、かい？」
「うっ……」
　今さらのように、ノエルはひらひらした自分の格好を見下ろし、赤面する。
戦闘しているときに、ファーショールもどこかへ行ってしまって、胸元も背中もあらわ

になっていた。
　私服はトリニティに預けたままだ。
　ロイドは自分のジャケットをノエルに羽織らせた。
「あ……ロ、ロイドさん」
「ノエル曹長が踏みこんでくれてなかったら、彼らに逃げられていたかもしれない。助かったよ」
「えっ、いえ、そんな！　あたし、爆弾に気づいてなくて、あやうく逃がしてしまうところでした。それどころか自分やワジ君の命まで……」
「たしかに、危険はあったかもしれない。でも、一連の事件の犯人を捕らえることができたのは、曹長たちのおかげだと思う」
　ロイドは笑みを浮かべる。
　沈んでいたノエルの表情が雪解けのようにやわらかくなっていった。
「……はい」
「ノエル曹長、ワジ……協力、感謝する。犯人の情報は集めてあるから大丈夫だと思うけど、必要なら後で話を聞きにいかせてもらうよ」
「了解しました、ロイドさん！」
「そのときは、君のためにとっておきのワインを開けるよ。二人っきりで朝まで語り明かそうじゃない」
「ワジ……いろいろ、つっこみどころが多すぎるぞ……」
がっくりとロイドは肩を落とした。
みんなが苦笑する。
ジオフロントの奥のほうから、機械の駆動音が響いてきた。
鋭敏な感覚を持つティオがつぶやく。
「大型エレベーターの音です。護送車が来たようですね」
「ふふ……先に行くよ。アディオス」
　ワジが非常階段のほうへと足を向ける。
後についていくノエルが、途中で振り返った。
「ロイドさん……」
「ん？」
「あたし、明日まで休暇なんです」
「ああ、そう言ってたな」
「ですから……その……」
　エリィとティオが、驚いた顔して見つめる。ランディとワジは苦笑していた。
輝くような晴れきった笑顔でノエルが敬礼する。

「あたし、明日はゆっくり街を見てみます！　自分が守るものを、この目で！」
「ああ」
「それでは、失礼します！」
　そう言って——
　ドレス姿の警備隊員は、階段へと駆けていくのだった。

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!!　オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.138プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①『黎の軌跡Ⅱ』《庭城探索》で組んでみたいパーティーは？
　アンケート②『黎の軌跡Ⅱ』で登場に期待したいモブキャラクターは？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN- 最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
4：創の軌跡　THE MISERABLE SINNERS
5：ファルコムニュース
6：暁の軌跡最新情報
7：英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を

応募締め切り　8月26日（金）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.138

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

Copyright	©Nihon Falcom Corporation.All rights reserved. ©2022 FIELD-Y ©DAISUKE ARAKUBO 2022 ©SHINKI KITSUTSUKI 2022 ©BOKUTENGO 2022

Falcom
日本ファルコム(株)のライセンス許諾商品です。